

主演女優賞

浜口 須美子

母は「生きるとは演じること」という。

1920年生まれの88歳。来年には卒寿を迎える。

家族4人の食事係であり、俳句を詠み、俳画を描き、フラダンスを踊る。

名前は富貴子。その日の行動によって、自分の名前を使い分けている。

台所仕事をするときには「おふきどん」。働き者である。

俳句の会に行く時は「富貴女」。物腰まで知的になる。

フラダンスの教室に行く時は「フキラ」。色気がある。

演じる役で、口紅の色も違う。

でも、それぞれの役に「おしゃれな」という形容詞がついている。

台所でのおしゃれな「おふきどん」は毎日違ったエプロンを着け、手首にはリストバンドをはめている。

俳句の会に行くおしゃれな「富貴女」は、ダイヤモンドが着いた眼鏡着用。

フラダンス教室に通う、おしゃれな「フキラ」は、お稽古の時から手を抜かない。バフスカートにあわせた髪飾りとレイを着け、ハイビスカスのイヤリングがお気に入りである。

フラダンスの発表会では、最高年齢でインタビューを受けて、「生きてるだけで丸もうけです」とステージを盛り上げ、度胸は女優そのものである。

家に墓地の案内の電話がかかってきた時は「嫁がお願いしたのでですか?」って、少し悲しい口調で尋ねる。母は、娘である私達夫婦と同居しているのに、シチュエーションは自由自在である。相手は謝って、慌てて電話を切るらしい。

訪問販売の人には「奥様はお留守で、私は留守番のもので何もわかりません」と、インターホンの前でお手伝いさんの役になりきっている。

昔、意地悪婆さんという番組があったが、人を傷つけない意地悪は人生を楽しむことだと母を見て思う。

母は、いつ自分の人生の幕が降りても悔いはないという。

そういつて、すでに10年は過ぎた。

母の人生のドラマの観客数は、森光子の「放浪記」より少ないけど、舞台で演じる女優より、生きることが演じること。「自分」というタイトルのドラマの主人公を演じている母に、主演女優賞をあげたい。